詞法小論小箋（一）

萩原正樹

はじめに

森川竹磎は、『鷗夢新誌』第三三集（明治二一年一〇月）より第六五集（同二四年一二月）まで凡て二六回にわたって「詞法小論」を連載した。[1] これは、田能村竹田の『塡詞圖譜』に倣って、詞牌名、文字數、詞體數、別名、平仄を示す黒白圏、詞作例等を列記した簡便な詞譜である。

神田喜一郎博士は、この「詞法小論」について次のように述べておられる。

一般初學の徒のために塡詞の作法を説いたもので、その體裁は、田能村竹田の『塡詞圖譜』を考へればよい。然しこの計畫は、何としても當時の竹磎には無謀の擧であった。五代兩宋の詞も碌に讀んでゐない少年ではないか。（中略）十六字令に始まり賀新郎に至る二百五十四調・一百一十四體を收め、大體は萬紅友の『詞律』を抄錄したものである。先づは少年の作として、その努力を買つておく程度でよいかと思ふ。但し竹磎の作詞は、これから著しく進境を示してくる。「詩に別才あり、學に關するに非ざるなり。」或は一面の眞理なのであらうか。

（『日本における中國文學Ⅱ』、神田喜一郎全集第七卷、同朋舍出版、一九八六）

神田博士の評價は大變嚴しいが、たしかに「詞法小論」は、詞への熱い氣持ちを抱いてはいても、なお作詞經驗の淺い二〇歳の青年の「無謀」な著述であり、彼此の諸詞譜に比して簡に過ぎるきらいがあることは否めない。し

かしながら、森川竹磎の文學と詞學を考える上で、「詞法小論」の存在は決して輕視することはできないと思われる。

『鷗夢新誌』第六集（明治一九年六月）に初めて詩餘欄が誕生し、竹磎は一八歳にして詞の處女作「浣溪沙」「調笑令」を發表したのであるが、師である馬杉雲外の壓力もあって三ヶ月後の第九集（同一九年九月）で詩餘欄は消滅してしまった。その後森槐南に師事した竹磎が、第三二集（同二一年九月）に二年振りに「曲江秋」詞を載錄し、翌月の第三三集では詩餘欄を復活して「醜奴兒」「東風第一枝」の二作を掲げたその時に、「詞法小論」は連載を開始したのである。その背景には竹磎の、詞の創作と研究への並々ならぬ意欲があったと考えられよう。以後竹磎は、「詞法小論」の掲載と並行して、次々と多くの詞作を發表していく。竹磎が「わが日本塡詞史上に輝く唯一の專家」（神田博士前掲書）と稱される詞人へと大きく飛躍していくこの時期に書かれた「詞法小論」は、竹磎の詞作のいわば根底を支えていると言えるのである。また、約二〇年後の『詞律大成』に結實する森川竹磎の詞學の發展過程を探るためにも、「詞法小論」の所説は詳細に檢討される必要がある。さらに、他の漢詩人に與えた影響も考えれば、「詞法小論」の價値は明治大正期の詞學全體の中で正當に位置附けられなければならないであろう。

「詞法小論」の内容について、神田博士は「大體は萬紅友の『詞律』を抄錄したもの」とされている。また、竹磎自身も「詞法小論」の跋に「右二百五十四調。一百一十四體。就萬紅友詞律中。擧其最易見者。以爲例焉。亦可以窺豹之一斑矣。學者依此求之。庶幾乎無過矣。」と記しており、清・萬樹の『詞律』を多く參照したことが知られる。だが仔細に見ると、『詞律』とは異なる部分もあって、「『詞律』を抄錄したもの」として簡單には片附けられない問題を含んでいるように思われる。「詞法小論」を正當に評價するためには、まずなによりも、既存の詞譜との異同を明らかにしてその所説の由來を考究するという基礎的な作業がなされなければならないのである。

小稿はその基礎作業の一として、現在では稀覯の『鷗夢新誌』から「詞法小論」の本文を引き、收錄詞牌の他の詞譜[2]における記載狀況等を掲げて竹磎の所説の來源を尋ね、今後の研究の資としたい。

一、十六字令　十六字　一名蒼梧謠　單調（『鷗夢新誌』第三三集）

○韻◒●○○●●○叶○○●句◒●●○○叶

詞　　宋　蔡伸

天。休使圓蟾照客眠。人何在。桂影自嬋娟。

「詞法小論」本文では番號は記されていないが、本稿では檢索の便宜のため詞牌毎に通番を附した。また、詞牌下の「十六字　一名蒼梧謠　單調」の部分は、原文では二行に分かち書きされているが、ここでは一行で記載した（以下同）。

『詞律』（卷一）と、詞牌名、字數、別名、句式、詞作例ともに同じ。『欽定詞譜』（卷一）は詞牌名を「歸字謠」とし、「蒼梧謠」「十六字令」を別名とする。また、作例には張孝祥詞を掲げ、そのため平仄式も異なっている。『詞律校勘記』（卷上）は詞牌名に關して「按此調蔡友古名蒼梧謠、張于湖名歸字謠、周晴川名十六字令、萬氏既收友古詞、應名蒼梧謠、仍注明又名歸字謠、十六字令」と記し、「蒼梧謠」とすべきことを主張している。『詞律大成』（卷一）では「蒼梧謠」を詞牌名とし、「歸字謠」「十六字令」を別名にまわして「此調、蔡伸詞、名蒼梧謠、張孝祥詞、名歸字謠、至元周晴川、始有十六字令之稱、萬氏從周詞、以十六字令爲正名、今改之」と述べる。杜文瀾が、單に蔡伸詞だから「蒼梧謠」にすべきと言うのに對して、『詞律大成』は詞牌の名稱を歷史的な觀點から考えているのであるが、この説が正しいことは、拙稿「森川竹磎の『詞律大成』について」（「學林」第二一號所收）を參照。なお『詞律大成』では、第二句第五字を「可平」としている。

二―a、閒中好　十八字　單調　凡二體（同第三三集）

○○●句○●●○○○韻●●○○●句●○○●○叶

詞　唐　段成式

閒中好。塵務不縈心。坐對當窓木。看移三面陰。

『詞律』（巻一）と同。第四句第一字の「看」字について、萬樹は「看字、作去聲讀、觀張善繼作亦然」と言うが、同じ段成式詞を擧げる『欽定詞譜』（巻一）は「看」字を平聲としている。また『詞律校勘記』（巻上）も「按此字亦有用平者、似可不拘」と述べる。『詞律大成』（巻一）では句式に異同がないが、第三句第四字「窓」を「窗」字に改め、「此即長短句詩」と言う。

二―b、閒中好　十八字　單調（同第三四集）

○○●句●●○○●韻●●○●○句○○●○●叶

詞　唐　鄭符

閒中好。盡日松爲侶。此趣人不知。輕風度僧語。

『詞律』（巻一）『欽定詞譜』（巻一）ともに同。『詞律』は「用仄韻與前異」とし、『欽定詞譜』は「此詞用仄韻」と註す。『詞律大成』（巻一）も同じ詞を擧げ、「用仄韻與前詞異、第三四句、俱平仄拗」と記す。

三―a、南歌子　二十三字　歌又作柯　一名春宵曲　單調　凡四體今錄三（同第三四集）

●●○○●句○○●●○韻◐●●○○叶◐○○●●句●○○叶

詞　唐　温庭筠

手裏金鸚鵡。胸前繡鳳凰。偸眼暗形相。不如從嫁與。作鴛鴦。

『詞律』（巻一）は四體を錄し、最初にこの温庭筠詞を掲げるが、別名については「歌又作柯」と言うのみで、竹磎の擧げる「春宵曲」という名稱は『詞律』中には見えない。『欽定詞譜』（巻一）はすべて七體を錄しているが、やはり冒頭に温庭筠の同一詞を載せ、詞牌下註に「單調者、始自温庭筠詞、因詞有恨春宵句、名春宵曲」と言う。また、『欽定詞譜』より前に編纂された『歴代詩餘』（巻一、南歌子、上海書店影印本、一九八五）では温庭筠詞四首を擧げて「一名春宵曲、一名水晶簾」と記している。『欽定詞譜』が引く「恨春宵」句は、首句「轉眄如波眼」詞（『花間集』巻一所收）の末句であるが、この詞が何時頃どこで「春宵曲」と稱されているか不明である。ただ、張璋・黄畬編『全唐五代詞』（二二六頁、上海古籍出版社、一九八六）所收「轉眄如波眼」詞の「校勘」に「［調名］選聲集作『春宵曲』」とあり、同書「引用書目」に見える清康熙本『選聲集』（清吳綺程洪編、中國科學院圖書館藏本）がこの詞を「春宵曲」と題していることが知られる。『校刊詞律』の恩錫・杜文瀾校記では「按此詞尚有恨春宵、水晶簾、十愛詞等名」とのみ言い、「春宵曲」の名は見えないので、竹磎は『歴代詩餘』か『欽定詞譜』かいずれかによって「春宵曲」という別名を補ったのではないかと思われる。なお『欽定詞譜』の平仄式は第三句第一字「◒」第四句第一字「◓」をそれぞれ「○」「●」としている。『詞律大成』（巻一）はすべて五體（補體一）を載錄し、この體についてはやはり温庭筠詞を擧げて「歌或作柯、又名春宵曲」と記し、「起二句皆用對偶文字」と註す。

三―b、南歌子　二十六字　一名碧窓夢　單調（同第三四集）

●●○○●句○○●●○韻◓○●●●○○叶◒●●◓○○●句●○○叶

詞　　唐　張泌

柳色遮樓暗。桐花落砌香。畫堂開處晚風涼。高捲水晶簾額。襯斜陽。

第四句「水晶簾額」は、『鷗夢新誌』では「水晶廉額」となっているが、連載の最後に附された「正誤」（『鷗夢新誌』第六五集）によって正した。引用詞、句式は『詞律』（巻一）と同（ただし『校刊詞律』は、第四句「高捲」を「高卷」に作る。）。ただ三―aと同様、別名「碧窗夢」は『詞律』には見えない。『欽定詞譜』（巻一）は「南歌子」二十六字體として別の張泌詞（首句「錦薦紅鸂鶒」）を擧げ、詞牌下註に「張泌詞、本此添字、因詞有高卷水晶簾額句、名水晶簾、又有驚破碧窗殘夢句、名碧窗夢」と記す。先に引いた『歷代詩餘』『校刊詞律』いずれにも「碧窗夢」の名は見えず、竹磎は『欽定詞譜』に從って「碧窗夢」を採ったとも考えられるが、それならば『欽定詞譜』に同時に擧げられている「水晶簾」の名も採ったはずであり、あるいは他に據るところがあったかもしれない。張泌詞を「碧窗夢」と稱する説は、『欽定詞譜』以前には見出すことが出來ず、後考を俟ちたい。句式について『欽定詞譜』は、第四句第一、三字を「○」「●」としている。『詞律大成』（巻一）は、『詞律』「詞法小論」と同じ張泌詞を擧げるが、第四句を「高卷水精簾額」に作り、『欽定詞譜』と同じく第一、三字を平、仄のままとする。別名については「又名碧窗夢、水精簾」とし、「比前詞、第三句多二字、第四句多一字、末九字一氣、不妨讀作九字一句」と述べている。

三―c、南歌子　五十二字　一名望秦川　風蝶令　雙調（同第三四集）

◓●○○●句○○●●○韻◓○○◒●●○○叶◓●◒○●●句●○○叶　◒●○○●句○○●●○叶◓○○◒●●
○○叶◓●◒○○◓●句●○○叶

詞　　宋　歐陽脩

鳳髻金泥帶。龍紋玉掌梳。去來牕下笑相扶。愛道畫眉深淺。入時無。　弄筆偎人久。描花試手初。等閒妨了

繡工夫。笑問鴛鴦兩字。怎生書。

兩結九字。作上四字下五字句。亦無妨。

後闋第四句「笑問」は原文「笑閒」であるが、「正誤」によって改む。別名の記載、作例詞は『詞律』（巻一）と同。前闋第四句「畫」字、後闋第一句「弄」字を『詞律』は「可平」とし、「詞法小論」の圏點「◒」と合わないが、これは「詞法小論」の方の誤植であろう。詞後に「兩結九字。作上四字下五字句。亦無妨」と註しているのは、『詞律』の「兩結語氣、可上六下三、亦可上四下五」に據ったもの。『詞律』は以上三體の後石孝友五十二字體を載せる。『欽定詞譜』（巻一）は、この體の作例として毛熙震五十二字體（首句「惹恨還添恨」）を擧げる。句式について『欽定詞譜』は、「此詞前後兩結、或上六字讀、下三字句、或上四字讀、下五字句、須蟬聯不斷、可讀不可句、詞中此等句法最多」と述べ、前後闋第四句と第五句との間を「讀」としている。また別名に關しては詞牌下註に「周邦彦詞名南柯子、程垓詞名望秦川、田不伐詞、有簾風不動蝶交飛句、名風蝶令」と記す。以上三體の後、辛棄疾五十二字體、花草粹編無名氏五十三字體、周邦彦五十四字體、石孝友五十二字體を載錄している。なお『詞律拾遺』（巻二）は、「南歌子」補體として周邦彦五十四字體、秦觀五十五字體を掲げる。『詞律大成』（巻一）は、この五十二字體に『欽定詞譜』と同じ毛熙震詞を擧げるが、句式、別名等については、『詞律』と同じ。註に「前後段、結九字、一氣串下、蟬聯不斷、或可四字一豆、或可二字一豆、不必拘」と述べ、「此體、萬氏錄歐陽脩鳳髻金泥帶詞、今改之」と言う。この後、石孝友五十二字體を收め、周邦彦五十四字體を「補體」として補っている。

四―a、荷葉杯　二十三字　單調　凡三體今錄二（同第三五集）

◒●◒○○●韻○●叶●○○換平●○○●●○●換仄○●叶仄二●○○平叶

詞　唐　温庭筠

鏡水夜來秋月。如雪。採蓮時。小娘紅粉對寒浪。惆悵。正思惟。

『詞律』（巻一）は「荷葉杯」の作例として三體を收め、最初にこの温庭筠詞を擧げる。句式も同じであるが、第四、五句の仄韻を『詞律』では平韻も含めた三番目の換韻として「三換仄」「叶三仄」と註しており、これを竹磎は「換仄韻」「叶二仄」と仄韻のみを數えた記述に改めている。『詞律』はこの體の後、顧敻二十六字體（首句「春盡小庭花落」）を載せる。『欽定詞譜』（巻一）も「荷葉杯」は三體を錄し、二十三字體の作例には『詞律』「詞法小論」とは別の温庭筠詞（首句「一點露珠凝冷」）を掲載している。平仄式については、第一句第一、三字をともに仄聲とし、『詞律』「詞法小論」が仄の可平としているのと異なっている。二十六字體には、『詞律』と同じ顧敻詞を掲げる。『詞律大成』（巻一）も三體を擧げ二十三字體の作例に温庭筠「鏡水夜來秋月」詞を錄する點、『詞律』「詞法小論」と同様であり、第四、五句の仄韻について「換仄」「叶二仄」と記すのは「詞法小論」と同じいが、二十六字體には顧敻の別の詞（首句「曲砌蝶飛煙暖」）を載せ、「此體、萬氏錄顧別一首、春盡小庭詞、今改之」と註している。

四―b、荷葉杯　五十字　雙調（同第三五集）

◐●◐○○○●韻○●叶○●●○○○換平◐○○○●●○○○平叶◐●●○○○平叶　◐●◐○○○●換仄韻○●叶二仄○●●○○○

再換平韻◐○○○●●○○○平叶二◐●●○○○平叶二

詞　五代　韋莊

記得那年花下。深夜。初識謝娘時。水堂西面畫簾垂。携手暗相期。　惆悵曉鶯殘月。相別。從此隔音塵。如今俱是異鄉人。相見更無因。

『詞律』（巻一）は同じ「記得那年花下」詞を韋莊ではなく皇甫松の作として掲げている。他の詞譜では、『欽定詞譜』（巻一）は詞牌下註に「此詞有單調雙調、單調者有温庭筠顧敻二體、雙調者只韋莊一體、俱見花間集」と記して同じ詞を韋莊詞として擧げ、『校刊詞律』恩錫・杜文瀾校記は『欽定詞譜』に從って「即此詞非皇甫松作」と述べている。李一氓『花間集校』（巻二、人民文學出版社、一九五八）に據れば、『花間集』諸本も「記得那年花下」詞を韋莊詞として錄しており、『詞律』が皇甫松の作とするのは誤りであろう。竹磎は萬樹の誤りを正して作者を韋莊と改めているのである。句式については、四―aと同樣『詞律』が「三仄」「四平」と記しているのを「二仄」「二平」に變えているほか、前闋第五句第一字を『詞律』が「可仄」としているのを竹磎は逆に「◓」と圈點を附しているが、「携」字は平聲字であり、これは「詞法小論」の誤植であろう。『欽定詞譜』は、前闋第一句第一字、第五句第一字、後闋第一句第三字、第三句第一字、第五句第一字をそれぞれ「詞法小論」とは異なり「●」「◒」「●」「◒」「○」としている。『詞律大成』（巻一）では同じ韋莊詞を引いて前闋第五句第一字「携」を「可仄」に訂正している。その他の句式は『欽定詞譜』に準じるが、後闋第三句第一字「從」は平聲のまま としている。

五―a、漁歌子　二十七字　一名漁父　漁父樂　單調　凡三體今錄二（同第三五集）

◒●◒○●●○韻◒○◒●●○○叶○●●句●○○叶◒○◒●●○○叶

詞　　**唐　張志和**

西塞山前白鷺飛。桃花流水鱖魚肥。青箬笠。綠蓑衣。斜風細雨不須歸。

詞體數について、原文は「凡二體」となっているが、「正誤」により「凡三體今錄二」に改む。『詞律』（巻一）は「詞法小論」と同じ張志和二十七字體と孫光憲五十字體の二體を擧げている。一方『欽定詞譜』（巻一）

は、張志和二十七字體、張志和二十七字體、李煜二十七字體、蘇軾二十五字體、顧夐五十字體、孫光憲五十字體のすべて六體を掲載している。また竹磎の『詞律大成』（巻一）では、張志和二十七字體、李煜五十字體の二體を錄す。「詞法小論」が何に據って詞體を三體としているのか、その根據は明らかでないが、『詞律』に「玄眞又一首、起二句、松江蟹舍主人歡、菰飯蓴羹亦共餐、平仄全異、（中略）、然自宋以後、皆依西塞一體、今作者宜從之」と記され、『詞律大成』が「首句、次句、結句、唐詞平仄互異者不爲少、今采張別一首、三句俱相反者、附錄于左、以資參考」として張志和の「松江蟹舍主人歡」詞（『欽定詞譜』所引張志和二十七字體第二體）を引いていることからみて、この詞を又體と考えていたのではないかと思われる。別名の「漁父」「漁父樂」についても『詞律』と異同がある。『詞律』は「又名漁父」と記すのみで「漁父樂」の名は擧げていない。『欽定詞譜』は詞牌下註に「和凝詞更名漁父、徐積詞名漁父樂」と述べ、「漁父樂」の別名を錄している。徐積の詞は、『全宋詞』（第一册、二一四頁）に六首見え、それぞれ「漁父樂」「無一事」「堪畫看」「誰學得」「君看取」「君不悟」という詞牌名が附されている。竹磎は『欽定詞譜』に據ったのであろうか。なお『詞律大成』は、別名として「漁父」「漁父詞」「漁父樂」を擧げている。さらに句式についても『詞律』と異なり、『詞律』は先に引いた「今作者宜從之」という方針に從って「可平」「可仄」の註記を一切行っていない。『欽定詞譜』の句式も大きく異なり、「◐◐◐◐◐◐●◐○○韻◐◐○◐●◐○韻◐◐●句●○○韻◐◐◐◐●◐◐○韻」としている。『詞律大成』では第一句第三字を平聲としているほかは「詞法小論」と同じ。

五―b、漁歌子　五十字　雙調（同第三五集）

●◐○句○◐●韻◐○◐●○○●叶○●●句●○○句◐●◐○◐●叶　●◐○句○◐●叶◐○◐●○○●叶
○●●句●○○句◐●◐○◐●叶

詞　　五代　孫光憲

泛流螢。明又滅。夜涼水冷東灣濶。風浩浩。笛寥寥。萬頃金波重疊。　杜若洲。香郁烈。一聲宿雁霜時節。經雪水。過松江。盡屬儂家風月。

前闋末句と後闋第一句の平仄式が、原文では「●叶●◓　○句」となっているが、これは明らかに誤植であり、「正誤」に従って改めた。また、孫光憲詞の後闋第二句「香郁烈」を原文は「香都烈」に作るが、これも「正誤」によって訂した。『詞律』（巻一）と同。句式について一箇所、第一句第二字「流」を竹溪が「◓」としているところを、『詞律』は平聲のままとしている。『欽定詞譜』（巻一）は孫光憲の詞を擧げ、その詞句そのままの平仄を掲げている。これは、孫光憲詞の前に引く顧敻詞五十字體で平仄を校定しているからであろう。なお『欽定詞譜』所收の孫光憲詞前闋第五句は「水寥寥」に作る。また、杜文瀾『詞律校勘記』（巻上）も「孫光憲詞、笛寥寥句、笛字歐陽烱花間集作水字」と言う。しかし、李一氓『花間集校』（巻八）に據れば「笛」を「水」に作るテキストは無く、また『全唐五代詞』（八三〇頁）「校勘」にも「水」に作る例は紹介されておらず、『欽定詞譜』『詞律校勘記』が「水」とするのは誤りとすべきであろう。『詞律大成』（巻一）は先に述べた如く李珣詞を載せ、「此體、萬氏錄孫光憲泛流螢詞、今改之」と記す。平仄式も李珣詞を基準としており、『詞律』「詞法小論」と若干異なっている。

六―a、憶江南　二十七字　單調　凡三體今錄二　一名夢江南　望江南　望江梅　江南好　夢江口　歸塞北　春去也　謝秋娘（同第三五集）

○◓●句◓●●○○韻◓●◓○○●●句◓○◓●●○○叶◓●●○○叶

詞　　唐　白居易

江南好。風景舊曾諳。日出江花紅勝火。春來江水綠如藍。能不憶江南。

『詞律』（巻一）は「憶江南」の體として、二十七字體、五十四字體、五十九字體の三體を擧げるが、二十七字體の作例には皇甫松の作（首句「蘭燼落」、なお五十四字體には吳文英、五十九字體には馮延巳の作を立てる）を引く。竹磎はこれを白居易の作例に變えているのであるが、それに從って平仄式も第一句第二字、第三句第一字、第四句第一字の「◒」が『詞律』の「可平」という記載と異なっている。また別名についても、「詞法小論」は「夢江南」「望江南」「望江梅」「江南好」「夢江口」「歸塞北」「春去也」「謝秋娘」の八種を擧げているが、『詞律』では「又名夢江南、謝秋娘、夢江口、望江南、望江梅、春去也」とのみ記され、「江南好」「歸塞北」の名は見えていない。『欽定詞譜』（巻一）は白居易二十七字體、歐陽脩五十四字體、馮延巳五十九字體を載錄し、別名については詞牌下註に、單調の名として「謝秋孃」「江南好」「春去也」「望江南」「夢江南」「夢江口」「望江梅」、雙調の名として「安陽好」「夢仙遊」「步虛聲」「壺山好」「望蓬萊」を擧げ、最後に「太平樂府名歸塞北、註大石調」と述べている。「憶江南」詞の別名の多さについては、既に宋代の王灼『碧鷄漫志』（巻五、望江南、『詞話叢編』第一册所收本）が「望江南、樂府雜錄云、李衛公爲亡妓謝秋娘撰望江南、亦名夢江南、白樂天作憶江南三首、第一江南好、第二第三江南憶、自注云、此曲亦名謝秋娘、每首五句、予考此曲、自唐至今、皆南呂宮、字句亦同、止是今曲兩段、蓋近世曲子無單遍者、然衛公爲謝秋娘作此曲、已出兩名、樂天又名以憶江南、又名以謝秋娘、近世又取樂天首句名以江南好、予嘗歎世間有改易錯亂誤人者、是也」と指摘している。竹磎が補った「江南好」の名も、この王灼の語の中に見える。もう一つの「歸塞北」の名は、『歷代詩餘』（巻一、望江南）に「此調本李德裕爲亡妓謝秋娘作、原名謝秋娘、温庭筠作爲望江南、又名夢江口、白居易思吳宮錢塘之勝、作江南憶、劉禹錫作春去也、李煜作望江南、馮延巳作憶江南、後又名曰歸塞北、夢遊仙、皆一調而異名也」とある。竹磎は、『欽定詞譜』やこれらの記述から「江南

好」「歸塞北」の別名を追加したのではないかと考えられる。『詞律大成』（巻一）も白居易二十七字體、歐陽脩五十四字體、馮延巳五十九字體を收め、二十七字體の別名について「又名江南好、望江南、夢江南、望江梅、夢江口、謝秋娘、春去也、歸塞北」と記し、「詞法小論」と同じ八種を掲げている。

六―b、憶江南　五十四字　雙調（同第三五集）

○◒●句◒●●●○○韻◒●◒○○●●句◐○◒●●○○叶◒●●○○叶　○◒●句◒●●○○叶◐●◐○○●●句◒○◒●●○○叶◒●●○○叶

詞　　宋　吳文英

三月暮。花落更情濃。人去秋千閒挂月。馬停楊柳倦嘶風。堤畔畫船空。　厭厭醉。長日小簾櫳。宿燕夜歸銀燭外。啼鶯聲在綠陰中。無處覓殘紅。

原文は吳文英詞後闋第四句「啼鶯」を「啼鸚」に作るが、「正誤」によって改めた。引用詞、句式ともに『詞律』（巻一）と同。『欽定詞譜』（巻一）及び『詞律大成』（巻一）は、先に擧げた如く歐陽脩詞（首句「江南蝶」）を錄している。ただ『欽定詞譜』の方は、歐陽脩詞の文字そのままの平仄を記して、可平、可仄の半白半黒圈を附していない。『詞律大成』では、詞の文字により多少可平、可仄が異なっているが、全體としては『詞律』「詞法小論」と等しい句式とみなしている。なお、以上二體の後に擧げる馮延巳五十九字體は、『詞律』が首句「今日相逢花未發」詞であるのに對して、『欽定詞譜』『詞律大成』はいずれも首句「去歲迎春樓上月」詞となっている。

七―a、搗練子　二十七字　一名深院月　單調　凡二體（同第三五集）

○●●句●○○○韻◓●○○◑●○○叶◒●●◑○○○●●句◑○○◒●●○○○叶

詞　南唐　李後主

深院靜。小庭空。斷續寒砧斷續風。無奈夜長人不寐。數聲和月到簾櫳

別名、詞體數、句式、引用詞等すべて『詞律』（巻一）と同じ。『欽定詞譜』（巻一）も、「搗練子」二體を錄し、二十七字體の例として同じ「深院靜」詞を擧げる。しかし、作者を李後主ではなく馮延巳としている。『尊前集』（『唐宋元明百家詞』所收本及び『彊村叢書』所收本）ではこの詞を馮延巳の作としており、『欽定詞譜』は恐らくこれに據ったのであろう。なお『歷代詩餘』（巻一、搗練子）は李煜の作として「深院靜」詞を錄している。別名について『欽定詞譜』は、「一名搗練子令、因馮延巳詞、起結有深院靜、及數聲和月到簾櫳句、更名深院月」と述べる。また句式は、第一句第一字「○」第五句第一字「◑」をそれぞれ「◒」「●」に作る。『詞律大成』（巻一）は、「搗練子」三體（補體一）を收載し、二十七字體にはやはり李煜の「深院靜」詞を掲げている。別名に關しては「或加令字、又名深院月」と記し、第一句第一字を「可仄」とする。また「此調、與赤棗子、桂殿秋、解紅、句法皆同、但平仄有異同」と註記する。

七―b、搗練子　三十八字　雙調（同第三六集）

○●●句●○○○韻◓○●●○○叶●○○句○●○叶　○●●句●○○○叶◑○●●●○○○叶●○○◑句●○○○叶

詞　宋　無名氏

林下路。水邊亭。涼吹水曲散餘酲。小藤牀。隨意横。　猶記得。舊時經。翠荷鬧雨做秋聲。恁時節。不堪聽。

原文では無名氏詞前闋第三句「散餘酲」が「散餘醒」となっている。「正誤」に従い改める。句式、詞體例ともに『詞律』（巻一）と同。『詞律』は「見天機餘錦、與前調大異、前後同、只堪字用平異」と註する。『欽定詞譜』（巻一）『詞律大成』（巻一）は、いずれも李石三十八字體を擧げ、平仄式もそれぞれ少し異なっている。なお『詞律大成』は、以上二體の他、花草粹編無名氏詞五十二字體（補體）を載せている。

八、赤棗子　二十七字　單調（同第三六集）

●●●句●○○韻◒○◒●●●○○叶◒●◐○○○●●句◒○◐●●○○叶（同第三六集）

詞　　五代　歐陽烱

夜悄悄。燭熒熒。金爐香盡酒初醒。春睡起來回雪面。含羞不語倚雲屏。

『詞律』（巻一）と同じ。『欽定詞譜』（巻一）も同じ歐陽烱詞一體のみを收め、第一句第一字を「◐」、第三句第三字を「○」、第四句第三字を「●」に校定する。また『詞律大成』（巻一）も「夜悄悄」詞一體を錄し、『欽定詞譜』と同様の平仄式としている。

九、桂殿秋　二十七字　單調（同第三六集）

○●●句●○○韻○○●●●○○叶◐○◐●◐○●句◐●○○◒●○叶

詞　　唐　李白

河漢女。玉鍊顏。雲輧往往在人間。九霄有路去無跡。裊裊香風生珮環。

『詞律』（巻一）は、宋・向子諲の詞を擧げる。「詞法小論」が李白の作とする「河漢女」詞は、もう一首の「仙女下」詞とともに、唐・李德裕の「迎神」「送神」曲である。この事は既に、宋・邵博の『邵氏聞見後錄』

（巻一九、中華書局、一九八三）に両首を引いて「李太尉文饒迎神、送神二曲、予遊秦、尚有能宛轉度之音、或并爲一曲、謂李太白作、非也」と辨じられ、また宋・許顗の『彥周詩話』（『歷代詩話』所收、中華書局、一九八一）には「李衛公作步虛詞云、（中略）、嗚呼、人傑也哉」とあって、兩首が「步虛詞」として紹介されている。だが、清・朱彝尊は『詞綜』（巻一、中華書局香港分局據清康熙三〇年裘抒樓刊本影印本、一九七七）にこの詞を李白詞として收め、『歷代詩餘』（巻一、桂殿秋）も李白の名で錄している。また、清・王琦註『李太白全集』（巻三〇、中華書局、一九七七）が引く吳虎臣の語には「此太白詞也、有得于石刻而無其腔、劉無言倚其聲歌之、音極清雅」と見える。『欽定詞譜』（巻一）は、詞牌下註に「本唐李德裕送神迎神曲、有桂殿夜凉吹玉笙句、取爲調名」と記して『詞綜』『歷代詩餘』等の誤りを正し、『詞律』と同じ向子諲詞を掲げている。また『校刊詞律』（巻一）も『欽定詞譜』に從い、「按此本唐李德裕送神迎神曲、有桂殿夜凉吹玉笙句、取爲調名」と記す。竹磎が「河漢女」詞を引くのは、『詞律』の註に「太白有此調二首、一與此同、一首于紅旌句、平仄相反」と見え、『詞綜』『歷代詩餘』に作品が收錄されていることに據ったのであろうと思われる。二〇年後の『詞律大成』（巻一）では、作例に向子諲詞を擧げ、「按李白有桂殿秋二首、而其詞本係李德裕迎神送神詞、名曰步虛詞、平仄亦稍不同、今附錄于左以備考」と註して李德裕步虛詞を別に掲載している。

註

① 『鷗夢新誌』は、東京大學法學部明治新聞雜誌文庫所藏本を閲覽、複寫させていただいた。關係者各位に厚く御禮申し上げます。

② 主に參照した詞譜は次の通り。清・萬樹撰『詞律』二〇巻（康熙二六年序刊［保滋堂］本、小樽商科大學附屬圖書館

所藏本）、清・王奕清等奉勅撰『詞譜』四〇卷（北京市中國書店據清康熙五四年内府刻本影印本、一九七九、本文中には『欽定詞譜』として引く）、清・杜文瀾撰『詞律校勘記』二卷（咸豐一一年序刊本、東北大學附屬圖書館狩野文庫所藏本）、清・萬樹撰、恩錫・杜文瀾校『詞律』二〇卷（上海古籍出版社據清光緒二年本影印本、一九八四、本文中には『校刊詞律』として引く）、森川竹磎撰『詞律大成』二〇卷（存九卷、『詩苑』第一集～第四八集所收、一九一三～一九一七）。その他の書については、本文中に典據を示した。